

古辞書における「齒」の字体の変遷について

——旧字体と新字体の歴史——

田村夏紀

【キーワード】

字体、変遷、異体字、古辞書、「齒」

はじめに

漢字は中国から日本にもたらされた文字である。漢字の形は日本に伝わった後も変化してきた⁽¹⁾。例えば現在でも、日本の「齒」は中国では「𪗇」であり字体が異なる。以前は同じ「齒」を使用していたが、日本ではそれまでの旧字体に対して当用漢字の新字体が1946年に制定され、中国では簡体字が1956年から1964年までに制定されたため、今は正式な字体が異なっている⁽²⁾。

漢字を省略して作られた片仮名の字体には変遷があり、書写時代を推定する有効な指標になっている⁽³⁾。漢字の字体にも変遷があり、部首の形が変化してきたことや、同じ資料中でも字体が変化することなどが明らかになってきている⁽⁴⁾。しかし漢字字体の変遷の全容はまだ明らかになっていない。

日本の「齒」の字体には、かつて様々なバリエーションがあった。旧字体の「齒」

-
- (1) 佐藤稔「〈所〉〈仏〉〈原〉—上代における漢字の字形—」(国語学研究14、1975)、佐藤稔「漢字字形の史的把握—「般若心経」による試み—」(『国語学』114、1978.9)による。
 - (2) 山田忠雄『当用漢字の新字体—制定の基盤をたづねる—』(新生社、1958)には、日本の旧字体と新字体の関係、中国の簡体字と日本の新字体の関係について、形態上の差異や歴史的な使用例が示されている。
 - (3) 小林芳規『中世片仮名文の国語史的研究』(広島大学文学部紀要特集3、1971)による。
 - (4) 注(1)の論文、また山田俊雄「漢字字形の史的研究の問題とその一方向」(国語学72、1968.3)、山田俊雄「漢字手写の場合の字形の変容について—楊守敬旧藏本将門記を資料とする調査の方法とその概略—」(成城国文学論集1、1968.11)、田村悦子「親鸞の、特に坂東本『教行信証』の筆跡について」(美術研究318・320、1982.6・7)、山本秀人「漢字字体の一問題—院政・鎌倉時代書写の片仮名文における木偏と手偏について—」(福岡教育大学紀要41、1992)、拙稿「前田本『色葉字類抄』と黒川本『色葉字類抄』の漢字字体の差異について」(鎌倉時代語研究18、1995.8)、拙稿「漢字字体の史的研究に関わる一問題—親本・転写本関係にある『蒙求』二本を比較して—」(『国語文字史の研究四』和泉書院、1998)による。

以外にも、上下に分かれた「齒」、「𪗇」が二つある「齒」なども使用されていた。このように許容範囲に入り「齒」と同じように使用されるが、「齒」とは字体が異なる漢字を「齒」の「異体字」という。「齒」は現在の正式な字体であるから「正字」という。正字は時代により異なることがある。本稿では日本で使用されてきた「齒」の字体の変遷を見ていきたい。

1、調査方法

漢字の字体を調べる上で次のことに注意した。

- (1) 漢字の点画がはっきり分かる楷書で書かれた漢字を対象とする。
- (2) 書写・刊行された時期が分かる資料を対象とする。
- (3) 対象とする資料のジャンルを一定にそろえて比較する。

点画の形・つながり・切れ目などがはっきり分かる楷書の漢字を対象とする。書写・刊行年次が明らかなものを中心として、紙質・書風などから書写年代が推定されている資料も調べる。刊本が現れる前からの書写本を中心にして調べ、刊本も合わせて見ていく。

文献のジャンルには、辞書・漢籍・仏典・記録・史書・物語・往来物などがある。辞書は他の資料中の文字や語彙を調べた上で集成されたものであり、漢字の字体に対する客観的な視点をもった著者や書写者が関わっている可能性が高い。そこで本稿ではまず辞書の漢字字体を調べることにした。辞書には、漢和辞書・国語辞書・字体辞書・音義書・音韻書など様々なものが含まれる。文字・語彙について、音・意味・字体・使用方法などを解説したものを辞書として扱うことにした。ただし辞書の中に「異体字」として記された漢字は、実際には使用されない、時代を超えて収集された字体の場合もある。そのため字体の変遷を調べる際には除外して、別に考察することにする。すなわち辞書の書写者が、書写当時の人々にとっての「標準的な字体」として楷書で書き記した「齒」の字体の変遷を、奈良時代から明治時代まで見ていくことにする⁽⁵⁾。

調査対象にする漢字は、「齒」という漢字だけでなく、「齡（レイ）」字のような「齒」を部首とする漢字も含める。「齒」の字体が変化する時、漢字を構成する「齒」の部分も同じように変化すると思われるためである。

2、書写年次の明らかな古辞書での「齒」の字体の変遷について

まず、書写年次が明らかな平安時代から江戸時代までの十三資料の「齒」の字体を調べた⁽⁶⁾。今回調査した全資料の中には、①～③に分類した字体は複数の資料に多数見られたが、それ以外は各資料に分散していた。そのため④「その他」としてまとめ、下位分類として出現順に番号を付けることにした。また今回は「齒」の上部の「止」の部分の形と「凵」で囲まれた内部の形に注目した。その

ため「𠃉」の形については、「齡」のように漢字の左側にある場合「𠃉」となる形も見られたが、これを別字体として区別はしなかった。そこで字体の代表形を示す時はすべて「𠃉」の形にしている。

「異体字」として記された字体は表中には記さず、後の5で考察する。異体字が記されている辞書は表中の書名の後に（異）と記す。以下に字体の分類と実際の字の形を示す。

〈字体の種類〉

- ①上に「止」、下に「𠃉」の中に「米」がある今と同じ「齒」
- ②上に「止」、下に「𠃉」の中に四つの「人」と横線がある旧字体の「齒」
- ③上に「止」、下に「𠃉」の中に四つの「人」がある「齒」
- ④その他
 - ④-1 上に「止」、下に「𠃉」の中に四つの「人」と縦線がある「齒」
 - ④-2 上に「止」、下に「𠃉」の中に二つの「欠」がある「齒」

(5) 本稿で使用した資料は次の通りである。

『節用文字』（白帝社、1962）

『色葉字類抄研究並びに索引』（中田祝夫、峯岸明、風間書房、1964）

『天治本新撰字鏡増訂版』（京都大学文学部国語学国文学研究室、臨川書房、1967）

『中世古辞書四種研究並びに総合索引』（中田祝夫、根上剛士、風間書房、1971）

『古本下学集七種研究並びに総合索引』（中田祝夫、林義雄、風間書房、1971）

『多識編自筆稿本刊本三種研究並びに総合索引』（中田祝夫、小林祥次郎、風間書房、1973）

『異体字研究資料集成』（杉本つとむ、雄山閣、1973～1995）

『印度本節用集古本四種研究並びに総合索引』（中田祝夫、勉誠社、1974）

『倭玉篇夢梅本篇目次第研究並びに総合索引』（中田祝夫、勉誠社、1976）

『天理図書館善本叢書類聚名義抄』佛、法、僧（八木書店、1976）

『原装影印版古辞書叢刊玉篇略』（川瀬一馬、古辞書叢刊刊行会、1976）

『図書寮本類聚名義抄』（勉誠社、1976）

『高山寺古辞書資料』第一、第二（東京大学出版会、1977、1983）

『改訂新版文明本節用集研究並びに索引』（中田祝夫、勉誠社、1979）

『改訂新版古本節用集六種研究並びに総合索引』（中田祝夫、勉誠社、1979）

『合類節用集研究並びに索引』（中田祝夫、小林祥次郎、勉誠社、1979）

『古辞書音義集成』（築島裕、汲古書院、1979～1980）

『和刻本辞書字典集成』第二卷（長澤規矩也、汲古書院、1980）

『重校正字磨光韻鏡・磨光韻鏡字庫』（勉誠社文庫92、勉誠社、1981）

『大谷大学本節用集研究並びに総合索引』（片岡了、勉誠社、1982）

『鎮国守国神社本類聚名義抄』（勉誠社、1986）

(6) 加点点年次が記されているものも含める。

表1 書写年次の明らかな資料の「齒」の字体

番号	書写年次	書名	① 	② 	③ 	④ その他
㊦	794	新訳華嚴経音義私記		 187・4	 86・4	
㊧	1079	金光明最勝王経音義		 6ウ3		 ④-1 3ウ6
㊨	1111	大永二年本孔雀経音義			 上139ウ2	
㊩	1114	篆隸万象名義		 2・24ウ3	 2・22オ5	
㊪	1124	天治本新撰字鏡(異)			 128・5	 ④-2 4・3
㊫	1164	大般若経字抄			 4ウ6	
㊬	1227	新訳華嚴経音義			 54ウ5	
㊭	1228	貞元華嚴経音義			 10ウ4	
㊮	1479	文明十一年本下学集		 44・3	 103・5	
㊯	1485	文明十七年本下学集		 74・2		
㊰	1532	享禄五年本玉篇略		 中15ウ6		
㊱	1562	永禄五年本節用集	 59オ3	 9ウ7		
㊲	1750	正楷録(異)		 中2ウ3		

今と同じ①「齒」は㊱『永禄五年本節用集』(1562年、室町時代後期)に初めて現れる。十三資料中の一資料のみに見られた。旧字体の②「齒」も共に使用されている。②の方が先に、①が後に記されている。

平安時代から鎌倉時代までの八資料中では、③「齒」は大部分を占める七資料に、②「齒」は三資料に使用されている。室町時代以降の五資料では②はすべての資料に、③は一資料のみに使用されている。鎌倉時代までは③の方が、室町時代以降は②の方が多く使用されていたことが分かる。

②と③が両方使われている資料が三資料ある。⑦『新訳華嚴經音義私記』（平安時代）、⑤『篆隸万象名義』（院政期）では③が先に使用され、⑦『文明十一年本下学集』（室町時代）では②が先に使用されている。鎌倉時代までは③が、室町時代以降は②が優勢であったことから、複数の字体のうち先に使用される方が当時よく使われた字体であったようである。

①～③以外の字体は②または③の字体と共に使用されている。④『金光明最勝王經音義』（平安時代）では④-1「齒」が先に、丁寧に書かれ、②「齒」が後の割書き中に記されている。④『天治本新撰字鏡』（院政期）では④-2「齒」が先に、目次の「齒部」という字を書くのに使用され、③「齒」が後に記されている。④-1や④-2の方が②や③より先に使用され、丁寧に書かれている。




3、書写年代の推定されている古辞書での「齒」の字体の変遷について

2と同様にして、書写時代が推定されている奈良時代から江戸時代の二十七資料を調べた。上部が「山」や「上」になっている字体や、下部の「凵」が上下二つ重なった形になっている字体などの新たな字体も見られたので、④その他の下位分類に追加して示す。以下に字体の分類と実際の字の形を示す。

〈字体の種類〉

- ①上に「止」、下に「凵」の中に「米」がある今と同じ「齒」
- ②上に「止」、下に「凵」の中に四つの「人」と横線がある旧字体の「齒」
- ③上に「止」、下に「凵」の中に四つの「人」がある「齒」
- ④その他
 - ④-1 上に「止」、下に「凵」の中に四つの「人」と縦線がある「齒」
 - ④-2 上に「止」、下に「凵」の中に二つの「欠」がある「齒」
 - ④-3 上に「止」、下に「凵」の中に二つの「久」がある「齒」
 - ④-4 上に「山」、下に「凵」の中に四つの「人」がある「齒」
 - ④-5 上に「止」、下に「凵」の中に四つの「一」と横線がある「齒」
 - ④-6 上に「止」、下に「凵」の中に二つの「幺」がある「齒」
 - ④-7 上に「止」、下に「凵」が二つと中に二つずつ「人」がある「齒」
 - ④-8 上に「上」、下に「凵」が二つと中に二つずつ「人」がある「齒」
 - ④-9 上に「上」、下に「凵」の中に四つの「人」と横線がある「齒」
 - ④-10 上に「上」、下に「凵」の中に四つの「人」がある「齒」
 - ④-11 上に「上」、下に「凵」の中に四つの「一」がある「齒」
 - ④-12 上に「一」、下に「凵」の中に四つの「人」と横線がある「齒」
 - ④-13 上に「一」、下に「凵」の中に四つの「人」がある「齒」
 - ④-14 上に「止」、下に「凵」の中に四つの「一」がある「齒」

表2 書写年代の推定されている資料の「齒」の字体

番号	書写年代	書名	① 	② 	③ 	④ その他
㊦	奈良	石山寺本大般若経音義			 8・8	
㊧	平安初期	四分律音義			 26・3	
㊨	平安初期	醍醐寺蔵孔雀経音義			 4・3	
㊩	平安後期	醍醐寺蔵妙法蓮華教釈文		 8・6	 25・1	 ④-4 25・1
						 ④-5 25・1
㊪	院政期	前田本色葉字類抄		 上36・6	 上24・5	 ④-3 上24・5
㊫	院政期	来迎院本大般若経音義			 49・3	
㊬	鎌倉初期	学習院大学本伊呂波字類抄			 1・78・3	
㊭	鎌倉初期	小川本孔雀経单字		 195		
㊮	鎌倉中期	観智院本類聚名義抄(異)		 法上53・6	 法上1・4	 ④-1 法上52・8
						 ④-3 法上54・6
						 ④-6 篇目2・4
						 ④-7 法上54・1
㊯	鎌倉	節用文字			 56・3	
㊺	鎌倉末期	鎮国守国神社本類聚名義抄				 ④-2 159・4
㊻	室町中期	明応五年本節用集	 15・7			
㊼	室町中期	黒本本節用集	 14・1			
㊽	室町中期	篇目次第(異)		 目次6・2	 303・1	
㊾	室町中期	文明本節用集	 878・2	 58・1		

㉖	室町 中期	白河本字鏡 集（異）		齧 516・3	齧 517・6	齒 ④-7 516・2
						齧 ④-8 516・5
						齧 ④-9 517・6
						齧 ④-10 517・5
						齧 ④-11 517・3
						齧 ④-12 516・4
						齧 ④-13 517・1
㉗	室町	伊京集	齧 58・6			
㉘	室町 末期	音訓篇立			齒 543・3	
㉙	室町 末期	大谷大学本 節用集	齒 5・6			
㊀	室町 末期	温故知新書		齒 108・4		
㊁	室町 末期	静嘉堂文庫本 運歩色葉集	齒 37・4			
㊂	室町 末期	堯空本節用 集	齒 16・2	齒 16・2		
㊃	江戸 初期	兩足院本節 用集	齒 19・6			
㊄	江戸 中期	弘治二年本 節用集	齒 19・5			
㊅	江戸 中期	永祿二年本 節用集	齒 17・9			
㊆	江戸	寛元本字鏡 集（異）		齒 516・6		齒 ④-7 516・3
						齒 ④-14 518・5
㊇	江戸	黒川本色葉 字類抄	齡 下14才7	齡 上29ウ4	齒 上19ウ3	

今と同じ①「齒」は㉖『明応五年本節用集』、㊆『黒本本節用集』、㊃『文明本節用集』（室町時代中期）に最も早く使用されている。㉖㊆は①で統一され、㊃

は同じ行に②「齒」が先に、①が後に記される箇所がある。①は室町時代以降の十六資料中の十一資料に使用されている。

鎌倉時代以前の十一資料中では③「齒」は九資料に、②「齒」は四資料に使用され、室町時代以降の十六資料中では②は七資料に、③は四資料に使用されている。書写年次の明らかな資料と同様に、鎌倉時代以前には③が、室町時代以降には②が多く使用されている。

④『前田本色葉字類抄』(院政期)は多くの字が③「齒」と④-3「齒」で書かれている。その中で「齧(タイ)」字は②「齒」で書かれている。⑤『黒川本色葉字類抄』(江戸時代)も多くの字が③「齒」で書かれる中で、⑥『前田本色葉字類抄』と同じ「齧」字が②「齒」で書かれている。しかし⑦『前田本色葉字類抄』には全く見られない①「齒」が使用されている。

⑧『観智院本類聚名義抄』(鎌倉時代中期)は篇目と法上の表紙に④-6「齒」が書かれ、法上の「歯部」の中には②「齒」、③「齒」、④-1「齒」、④-7「齒」などの字体が使用されている。この本は二人の異なる書写者が分担して書いたことが明らかになっている⁽⁷⁾。一方の書写者は④-6のみを使用し、もう一方は多様な字体を使用している。

⑨『白河本字鏡集』(室町時代中期)は冒頭の「歯部」という字は④-7「齒」で書かれている。④-9「齒」、④-10「齒」のように「齒」の上部が「上」となっている字が多い。⑩『寛元本字鏡集』(江戸時代)も⑨『白河本字鏡集』と同じく「歯部」という字が④-7「齒」で書かれている。また「齧」字は⑨『白河本字鏡集』の④-11「齒」と似た④-14「齒」で書かれている。ただし⑩『寛元本字鏡集』の多くの字は②「齒」で書かれ、⑨『白河本字鏡集』に多く見られる上部が「上」となる字体は全く使用されていない。

書写年次の明らかな古辞書と同様に、①「齒」は室町時代から使用され始める。また鎌倉時代以前は②より③の字体が、室町時代以降は③より②の字体が多く使用されることも同様である。①がさらに早い室町時代中期に現れること、さらに多くの字体が使用されること、書写時代の異なる異本の字体に共通点と相違点が見られることも明らかとなった。

4. 出版された古辞書での「齒」の字体の変遷について

今と同じ①「齒」の字体は、書写年次の明らかな古辞書の中では⑨『永禄五年

(7) 草川昇『『類聚名義抄』についての一考察』(津西高校紀要2、1981.1)、佐藤栄作「字形から字体へー『観智院本類聚名義抄』の「ツ」とそれに付された平声点をてがかりに」(『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』1992)、小林恭治「観智院本類聚名義抄の筆跡による各帖の類別について」(訓点語と訓点資料94、1994.9)による。

本節用集』（1562年書写）に初めて用いられた。また室町時代中期書写と推定される㉠『明応五年本節用集』、㉡『黒本本節用集』、㉢『文明本節用集』に最も早い使用例が見られた。これらはすべて『節用集』である。『節用集』はイロハ順に語彙を収集し、振り仮名や漢字音を付けた辞書であり、室町時代から江戸時代にかけて数多く改編・増補され書写・出版された。使用者にとって実用的な辞書を作るために、実際に使用されている新しい字体を採用したと考えられる。






室町時代からは刊本が現れ始める。そこで刊本ではどのような字体が使用されているのか見ていくことにした。今回調べた室町時代から明治時代までの十五資料の中では、㉠「齒」と㉡「齒」の字体のみが見られた。以下に字体の分類と実際の字の形を示す。

〈字体の種類〉

- ㉠上に「止」、下に「口」の中に「米」がある今と同じ「齒」
- ㉡上に「止」、下に「口」の中に四つの「人」と横線がある旧字体の「齒」

表3 刊本の「齒」の字体

番号	出版年次	書名	㉠ 	㉡ 	㉢ 	㉣ その他
㉠	室町末期	饅頭屋本節用集	 12・8			
㉡	1597	易林本節用集		 168・7		
㉢	1605	夢梅本倭玉篇（異）		 341・3		
㉣	1605	慶長十五年本倭玉篇		 48・7		
㉤	1617	元和三年本倭名類聚抄		 91・1		
㉥	1630	寛永七年本多識編		 246・12		
㉦	1631	寛永八年本多識編	 260・3			
㉧	1680	合類節用集		 3・128・2		
㉨	1690	異字篇（異）		 総目4才5		
㉩	1692	異体字弁（異）		 右66才3		

㊸	1760	早大本同文通考(異)		303・9		
㊹	1780	磨光韻鏡字庫(異)		139・5		
㊺	1851	楷行薈編(異)		14・25ウ4		
㊻	1878	別体字類(異)		下7ウ9		
㊼	1881	楷法弁体(異)		天32オ4		

今と同じ㊸「齒」の字体は㊸『饅頭屋本節用集』(室町時代末期)、㊼『寛永八年本多識編』(1631年、江戸時代初期)の二資料に使用されている。刊本の中では比較的初期の資料に㊸が見られる。他の十三資料はすべて㊹「齒」が使用されている。どの資料もその資料内では一字体に統一されている。

刊本が現れてから、漢字の書かれた本を人々が目にする機会が飛躍的に増えた。書写本よりも広く普及した刊本の文字は、多くの人々にとって正式な字体として認識され、定着していったと考えられる。江戸時代に出版された古辞書における標準的な字体は㊹「齒」であり、㊸「齒」が使用される資料も見られる。明治時代の資料は一資料のみであるが㊹「齒」が使用されている。

5、異体字として古辞書に記された「齒」の字体について

「齒」の「異体字」が記されている古辞書は十四資料あった。新たな字体が多数見られたので、㊸の下位分類に追加して示す。字体注記は「正字」「古文」などと書かれているものはそれを記し、凡例や他の注記などから判断したものも記す。以下に字体の分類と実際の字の形を示す。

〈字体の種類〉

- ㊸上に「止」、下に「凵」の中に「米」がある今と同じ「齒」
- ㊹上に「止」、下に「凵」の中に四つの「人」と横線がある旧字体の「齒」
- ㊺上に「止」、下に「凵」の中に四つの「人」がある「齒」
- ㊻その他
 - ㊻-1 上に「止」、下に「凵」の中に四つの「人」と縦線がある「齒」
 - ㊻-7 上に「止」、下に「凵」が二つと中に二つずつ「人」がある「齒」
 - ㊻-10 上に「上」、下に「凵」の中に四つの「人」がある「齒」
 - ㊻-15 上に「𠂇」、下に「凵」の中に「メ」がある「𠂇」
 - ㊻-16 上に「止」、下に「凵」の中に二つの「人」と「兀」がある「齒」
 - ㊻-17 「山」と二つの「彡」でできた形が上下に二つある「齒」

- ④-18 上に「止」、下に「一」と「山」と四つの「人」がある「𪔐」
 ④-19 上に「山」、下に「口」の中に二つの「糸」と縦線がある「𪔑」
 ④-20 上に「山」、下に「口」の中に四つの「人」と縦線がある「𪔒」
 ④-21 上に「人」、下に「口」の中に「人」がある「𪔓」
 ④-22 上に「八」、下に「口」の中に四つの「一」がある「𪔔」
 ④-23 上に「一」が二つ、下に「口」の中に四つの「一」がある「𪔕」
 ④-24 上に「八」、下に「𠃉」がある「𪔖」
 ④-25 上に「山」、下に「口」の中に二つの「糸」がある「𪔗」
 ④-26 上に「止」、下に四つの「人」と「一」がある「𪔘」
 ④-27 上に「山」と二つの「玄」、下に「口」と四つの「人」がある「𪔙」
 ④-28 二本の縦線の間に二つの「一」、五つの「一」がある「𪔚」
 ④-29 上に「止」、下に「口」の中に「八」と「一」がある「𪔛」
 ④-30 上に「々」、下に「𠃉」がある「𪔜」
 ④-31 上に「止」、下に「口」の中に「八」と四つの「一」がある「𪔝」
 ④-32 上に「白」、次に「八」の下に「白」がある「𪔞」
 ④-33 上に「止」、下に「口」の中に四つの「人」がある「𪔟」
 ④-34 上に「山」、下に「口」と「土」と四つの「人」がある「𪔠」
 ④-35 「口」の中に三つの「八」がある「𪔡」
 ④-36 上に「止」、下に「口」の中に「十」と四つの「人」がある「𪔢」
 ④-37 上に「止」、下に「口」の中に四点と横線がある「𪔣」
 ④-38 上に「止」、下に三点と横線と二つの「人」と「口」がある「𪔤」
 ④-39 上に「止」、下に「口」の中に二点と二つの「一」がある「𪔥」
 ④-40 上に「一」、下に「山」と四つの「人」がある「𪔦」
 ④-41 上と下に「山」、間に四つの「人」と横線がある「𪔧」
 ④-42 上に「山」、下に「口」の中に「十」と四つの「人」がある「𪔨」
 ④-43 上に「山」、下に「口」の中に四つの「人」がある「𪔩」
 ④-44 上に「山」と二つの「人」、下に「口」と二つの「人」がある「𪔪」
 ④-45 上に「山」、下に「口」の中に「十」と四つの「人」がある「𪔫」

表4 ㊸『天治本新撰字鏡』の「齒」の正字・異体字

掲載順	1	2	3
字体の種類	③	③	④-15
用例 (128・6)	𪔫	𪔩	𪔪
字体注記	正字	俗作	古文

表5 ㊸『正楷録』の「齒」の正字・異体字





掲載順	1	2	3	4
字体の種類	②	①	②	④-16
用例 (中2ウ3)				
字体注記	正	倭	倭	倭

表6 ㊹『観智院本類聚名義抄』の「齒」の正字・異体字


掲載順	1	2	3	4	5	6	7	8	9
字体の種類	②	③	④-17	④-18	③	④-19	④-20	④-21	④-22
用例 (法上52ウ6)									
字体注記	正	俗	俗	俗	俗	俗	俗	古	古

表7 ㊺『篇目次第』の「齒」の正字・異体字



掲載順	1	2	3
字体の種類	②	④-23	④-24
用例 (303・1)			
字体注記	正	古文	古文

表8 ㊻『白河本字鏡集』の「齒」の正字・異体字

掲載順	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
字体の種類	④-7	④-25	④-26	④-10	④-27	④-23	④-20	④-21	④-24	④-24
用例 (516・3)										
字体注記	正	同	同	同	同	古	同	同	古	古

表9 ㊼『寛元本字鏡集』の「齒」の正字・異体字






掲載順	1	2	3	4	5
字体の種類	④-7	④-23	③	④-20	④-24
用例 (516・4)					
字体注記	正	古	同	同	古

表10 ㉔『夢梅本倭玉篇』の「齒」の正字・異体字

掲載順	1	2	3
字体の種類	②	④-28	④-24
用例 (303・1)	齒	𪗇	𪗈
字体注記	正	古文	古文

表11 ①『異字篇』の「齒」の正字・異体字

掲載順	1	2	3	4	5
字体の種類	②	④-28	④-29	④-30	④-24
用例 (下4ウ5)	齒	𪗇	𪗈	𪗉	𪗊
字体注記	本字	異字	異字	異字	異字

表12 ㉑『異体字弁』の「齒」の正字・異体字 1

掲載順	1	2
字体の種類	④-31	②
用例 (左36オ6)	𪗋	𪗌
字体注記	古	正体

表13 ㉒『異体字弁』の「齒」の正字・異体字 2

掲載順	1	2	3	4	5
字体の種類	②	④-32	④-33	④-34	④-24
用例 (右66オ3)	齒	𪗍	𪗎	𪗏	𪗊
字体注記	正体	異体	異体	異体	異体

表14 ㉓『同文通考』の「齒」の正字・異体字

掲載順	1	2	3
字体の種類	④-16	②	①
用例 (303・9)	𪗐	𪗑	𪗒
字体注記	省文	正	省文

表15 ㉑『磨光韻鏡字庫』の「齒」の正字・異体字

掲載順	1	2
字体の種類	㉑	㉑-35
用例 (139・5)		
字体注記	正	異

表16 ㉓『楷行薈編』の「齒」の正字・異体字

掲載順	1	2	3	5	10	14	17
字体の種類	㉑	㉑-36	㉑	㉑-1	㉑-37	㉑-38	㉑-39
用例 (14・25ウ4～26オ1)							
字体注記	正	太令驚	干禄上俗	南安公碑	米芾	朱之蕃	薰其昌

表17 ㉒『別体字類』の「齒」の正字・異体字

掲載順	1	2
字体の種類	㉑-40	㉑
用例 (下7ウ9)		
字体注記	別体	正

表18 ㉒『楷法弁体』の「齒」の正字・異体字

掲載順	1	2	3	4	5	6	7
字体の種類	㉑-41	㉑-42	㉑-42	㉑-43	㉑-44	㉑-45	㉑
用例 (天32オ3～4)							
字体注記	異	異	異	異	異	異	正

「正」とする字体は十四資料中の大部分を占める十一資料で㉑「齒」である。鎌倉・室町・江戸時代を通して正字は㉑であったと考えられる。他は㉑『天治本新撰字鏡』（院政期書写）では正字は㉑「齒」であり、㉑『白河本字鏡集』（室町時代書写）、㉑『寛元本字鏡集』（江戸時代書写）では正字は㉑-7「齒」である。（表4・表8・表9参照）

今と同じ㉑「齒」は、㉑『正楷録』（江戸時代書写）では「倭」とされ、㉑『同

文通考』（江戸時代刊）では「省文」とされている。江戸時代には①は正式な字体ではなく、日本で用いられる点画を省いた字体として存在していた。（表5・表14参照）

㊦『新訳華嚴経音義私記』（平安時代書写）を初めとする多数の資料で使用されてきた③「齒」は、㊧『天治本新撰字鏡』（院政期書写）に「正字」「俗作」、㊨『観智院本類聚名義抄』（鎌倉時代書写）に「俗」、㊩『寛元本字鏡集』（江戸時代書写）に「同」、㊪『楷行薈編』（江戸時代刊）に「干禄上俗」として記されている。（表4・表6・表9・表16参照）

㊫『観智院本類聚名義抄』、㊬『白河本字鏡集』、㊭『寛元本字鏡集』に見られる④-7「齒」は、㊮『白河本字鏡集』、㊯『寛元本字鏡集』に「正」として記されている。（表8・表9参照）

㊰『正楷録』（江戸時代書写）、㊱『異字篇』、㊲『異体字弁』、㊳『同文通考』、㊴『楷行薈編』、㊵『別体字類』（江戸時代刊）、㊶『楷法弁体』（明治時代刊）の七資料は字体辞書であり、多様な異体字を収集し整理することに主眼がおかれている。正字はすべて②「齒」であった。しかし鎌倉時代以前によく使用された③「齒」を異体字として記すのは㊴『楷行薈編』の一資料のみであり、室町時代以降によく使用された①「齒」を異体字として記すのは㊰『正楷録』と㊳『同文通考』の二資料のみであった。また今回調査した他の資料には使用例が見られない数多くの異体字も記されていた。これらの字体辞書は日本での「齒」の字体の実際の使用状況を反映していない面があると考えられる⁽⁸⁾。

6、中国における「齒」の字体について

中国の辞書ではどのような字体が記されてきたのか調べてみることにした。

『干禄字書』（唐、774年成立）の文化14年（1817）刊本には通字・正字が共に②「齒」で書かれた「齧」字が記されている。（所在39ウ2）

『龍龕手鑑』（遼（契丹）、997年成立）の咸化8年（1472）ころの刊本には②「齒」が「正字」、④-23「𪗇」が「古文」として記されている。（所在5・44オ8）

『大広益会玉篇』（宋、1013年成立）の寛永8年（1631）刊本には②「齒」が「正字」、④-28「𪗇」、④-24「𪗈」が「古文」として記されている。（所在131・5）

『康熙字典』（清、1716年成立）の1982年刊本では、「正字」として②「齒」が記され、「古文」として五つの字体が記されている。新たな字体が見られるので、以下に字体の分類と実際の字の形を示す。

(8) ㊴『楷行薈編』は魏晋の法帖に書かれた書道家の字体を収集したものであり、㊶『楷法弁体』は後晋に成立した仏典音義書の『隨函録』の「奇字異体」を収集したものであり、中国の異体字を記した字体辞書である。

〈字体の種類〉

- ④-46 「凵」の中に「乚」と四つの「一」がある「𪗇」
- ④-47 上に「八」、下に「白」がある「𪗈」
- ④-48 「凵」の中に「八」と二つの「一」がある「𪗉」
- ④-49 上に「止」、下に「凵」の中に「八」と二つの「一」がある「𪗊」
- ④-50 上に「白」、下に「由」がある「𪗋」

表19 『康熙字典』の「齒」の正字・異体字

掲載順	1	2	3	5	10	14
字体の種類	②	④-46	④-47	④-48	④-49	④-50
用例 (1460・6)	齒	𪗇	𪗈	𪗉	𪗊	𪗋
字体注記	正	古文	古文	古文	古文	古文

『宋元以来俗字譜』（中華民国、1930年刊）には、「正楷」として②「齒」が記され、①「齒」は『京本通俗小説』（元刊）、『薛仁貴跨海征東白袍記』（明刊）、『目蓮記彈詞』（清刊）などに見られ、②「齒」は『古今雜劇』（元刊）、『朝野新聲太平樂府』（元刊）に見られることが記されている。（所在132・7）

中国においては、②「齒」が常に正字である。日本ではいくつかの例外はあったが、ほぼすべての辞書で同じく②が正字であった。辞書以外の資料では、①「齒」は元の時代（13世紀）から清の時代（19世紀）まで幅広く使用されている。日本の辞書では、室町時代中期（15世紀）に①の最も早い使用例が見られた。

7、古辞書における「断」の字体と「齒」の字体の関係について

旧字体の②「齒」の「凵」の内部の形を「米」と省略したのが今の「齒」である。同様に内部が「米」と省略された漢字に「断」字がある。旧字体の「断」は「凵」の内部に四つの「乚」と横線がある複雑な字体である。平安時代から江戸時代まで、「断」の方が「斷」よりも多く使用されてきた。（㉞『新訳華嚴經音義私記』（平安時代書写）、㉟『貞元華嚴經音義』（鎌倉時代書写）、㊱『弘治二年本節用集』（江戸時代書写）などに「断」が使用されている。）正字は「斷」または「斷」であり、「断」は異体字であった。（㊲『観智院本類聚名義抄』（鎌倉時代書写）・㊳『異字篇』（江戸時代刊）では「斷」・「斷」の字体を「正」、「断」の字体を「俗」・「異字」とする。）「断」は「齒」よりも早くから「米」と省略する形が使用されてきた。

②「齒」の内部にも横線がある。また「乚」が二つ書かれる字体もある。「断」

との共通点があるため、「断」と省略されるのに倣って「齒」を「𪗇」と省略したと考えられる。画数が多い複雑な漢字を簡略化しようとする方向性が見える。中国の簡体字の「𪗇」字も、日本の新字体の「米」への省略とは異なるが、②「齒」の「口」の内部にある四つの「人」を一つに減らして生まれた字体である。

8、時代別に見た「齒」の字体の使用状況について

最後に今回取り上げたすべての日本の古辞書の「齒」の字体の使用状況を一覧してみる。西暦500年ごとに区切り、資料の番号を記す。() 内に番号を記したものは「異体字」としてのみ記されている場合である。

表20 書写・刊行時代別に見た「齒」の字体

分類 番号	今と同じ ①	旧字体 ②	横線がない ③	その他 ④
字体の代表形	𪗇	𪗇	𪗇	𪗇 𪗇 など
西暦				
700			㊦	
		㊦	㊦	
800			いう	
900				
1000		㊦	㊦	㊦
		イお	お	イお
1100		㊦	ウエオカ	オ
			カ	
1200		㊦	キクキ	
		㊦	㊦	㊦
1300				㊦
1400				
	㊦㊦㊦	㊦㊦㊦㊦	㊦㊦㊦	㊦ (㊦)
1500		㊦		
	㊦㊦㊦㊦A	㊦㊦㊦㊦B	㊦	
1600	㊦㊦	CDE㊦		(C)
		H I J		(I) (J)
1700	㊦㊦㊦	㊦㊦	㊦ (㊦)	㊦
	(㊦) (㊦)	㊦㊦㊦㊦		(㊦) (㊦) (㊦)
1800		M N O	(M)	(M) (N) (O)

今と同じ①「齒」は室町時代（15世紀）から使用され始める。また②「齒」と③「齒」を比べると、鎌倉時代（13世紀）までは③の方が優勢であり、室町時代（15世紀）からは②の方が優勢になっている。④の多様な字体は平安時代後期（11世紀）から見られる。江戸時代（17～19世紀）には異体字としてのみ辞書に記される字体が多くなる。

まとめ

奈良時代から明治時代までの古辞書を調べると、今と同じ①「齒」は室町時代の『節用集』に初めて使用されていた。鎌倉時代までは③「齒」が多く、室町時代からは書写本では①「齒」が、刊本では②「齒」が多く使用されている。古い字体③から新しい字体①へと移り変わってきた状況が明らかになった。正字は②「齒」と記されることが多いが、実際には多様な字体が共存していた。

1946年に当用漢字が制定されるまでは旧字体の②「齒」が正式な字体であり、今は新字体の①「齒」が正式な字体になっている。室町時代、昭和の第二次世界大戦後には実用性を求めて簡略化し、明治時代には歴史的事実を尊重して複雑な正字を使用し、江戸時代には多様な異体字を解説するために多数の字体辞書を編集し、漢字の形をめぐって人々の意識は様々に揺れ動いてきた。字体が一つに決められている方が便利ではあるが、許容範囲が広がった時代の多様な異体字には、それぞれの時代の文化と人間の生きてきた証が映し出されているように思われる。

今後は、①の字体が使用されるようになった時期を詳しく見るために室町時代の資料を重点的に調べる必要がある。奈良時代以前や明治時代以降についても資料を増やして調べていきたい。辞書以外の資料も、漢籍・仏典・記録などのジャンル別に字体を調べていく。また「辛」と「辛」の違いなど、他の種類の漢字についても字体の変遷を調べていきたい。

（たむら なつき／大阪大谷大学文学部 聴講生）